

---

N . O .

水晶人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N・O・

### 【Nコード】

N8558I

### 【作者名】

水晶人

### 【あらすじ】

純正ファンタジー世界で過去に傷を負ってるっぽい少女と百合少女のカップルがモンスター相手に無双する作品……の真逆を地で逝く（誤植でない）バッドエンド上等殺戮上等、誰も救われず誰も救えない英雄譚……らしきもの（あらすじになっていないというお叱りは受けませぬ。真面目にあらすじ書いたらネタバレですし……わかるよね？）

## 咆哮か、或いは慟哭か（1）（前書き）

あらずじでかなりふざけましたが、本編は暗い上に重いノリです。残酷な描写がかなりあります。文字の上のもので、更に甚だ抽象的な描写ですので特に差し支えないかと思いますが、それでも苦手な人はユーターンして下さい。

また、このサイトによくある主人公無双な物語でもありません。主人公は優秀ですが、ひたすら苦勞し苦悩し苦戦します（その予定です）。

そうというのが嫌な方もユーターンして下さい。

あ、間違ってもパソコンの前でユーターンしたり携帯持ちながらユーターンしたりしないで下さい。ブラウザの戻るとかで前のページに戻ってください。水晶人からの切実なるお願いです。

長い前書きになりましたが、もしよろしければ拙作N・O・（ノープレス・オブリージユ）のちょっと声を大にして言にくい世界をお楽しみ……下さい？

## 咆哮か、或いは慟哭か（1）

獣の遠吠えが、どこからか響いている。

殷々と響くそれは、山林の隅々まで反響し、そこそこに潜む小動物たちが慌しげに駆けてゆく。

それを横目で見やりながら、素朴な山林には不釣り合いな、銀色に輝く甲冑に身を包んだ人影が胸を張って堂々と山道を登っていく。

「この辺り、かしら？ 獵師が襲われたというのは」

完全に頭部を覆う型の兜の、面頬の隙間から覗く黄金の瞳が、周囲を見回す。腰の剣帯に下げた異様に刀身の薄い直角三角形の剣の柄頭に、右手が軽く添えられている。

後背に負った黒く巨大な剣が、動作に合わせて重々しく揺れる。

「さあ？ 分かりませんねー。そもそも、こんな見栄えしない山道なんて、見分けがつくものなのでしょうか？」

独白ともとれる言葉にそう返すのは、全身を黒で統一された、魔女の衣装のような服装に身を包み、背中に一輪の百合の花を模した身の丈ほどもある造形物を背負った少女だった。

「イオ、うるさいから黙ってなさい」

「いやです」

苛立ちを含んだ声に、イオと呼ばれた少女は素っ気無く返す。

「黙りなさい」

「断固拒否します」

「私の言うことが聞けないの？」

「いかにユリアお嬢様の命令とはいえ、精神と肉体の自由は認められて然るべきかと」

「どうしても、聞けないというのね？」

「無論です」

一拍を置いて、死刑宣告の如き言葉が落ちる。

「……じゃあ、今度から、ベッドは別々にするわ」

「ええッ！？ そんな！」

悲鳴にも似た叫びが木霊し、イオが絶望の貌で立ち尽くす。

「精神と肉体の自由は、認められて然るべきよね？ イオ」

全身を甲冑で固めた少女　ユリアはすまし顔で言うと、一寸前の事など無かったかのように視線を前へと戻した。

「お嬢様……イオは悲しいです」

黒衣を顔を押し付けて嘆くイオを尻目に、背に負った巨大な剣と盾、甲冑が生み出す物々しい金属音を奏でながらユリアは山道を登っていく。

どこまでも変わらない山林の風景に、銀色と黒の二人組は異様だった。だが、しばらく登ったところで、その異様さに相応しい光景が二人の目の前に姿を見せた。

肺腑を侵す血臭が二人の鼻をつく。

「……なんて、こと」

夥しい量の血が、春の山林を朱に黒にと染め上げていた。周囲の木々は半ばからへし折れ、純然たる暴力の跡には、数十という人の屍が、無残な様を見せていた。

「先行していた討伐隊は、全滅のようですね」

その呟きは、目の前の惨状に対して、特段何も感じていない声色だった。鉛色の瞳が、無機質な色合いで骸の群れを眺めている。

「　　そのようね。そして、何故、私たちに依頼が回されてきたか、その意味もようやく理解できた」

「そうですね、お嬢様」

獣の唸りと、風を裂く音は同時に起こった。

銀の閃きが収まると、上顎から上を切断された獣が、跳躍の勢いのままに地面を滑っていった。雄牛ほどの大きさの、灰褐色の塊が二人の間を横切る。

二人の目線は、地面に激突して動かなくなった死骸から前へ。

巨大な灰褐色の獣たちが、列を成してユリアたちの前に姿を現していた。

「北国に住むとされる巨狼と、こんなところで出会うなんてね」

「伝聞とは毛の色が違うので、もしかすると種類が違うのかもしれない。当然、詳しくは分かりませんが」

「なら言わなくてもいいわよ」

呑気な会話の合間にも、二人は巨狼の群れに包囲されつつあった。巨体に似合わない俊敏さで巨狼は瞬く間に二人を包囲する。

それを気にする風でもなく、機動性を大きく殺ぐ背の大剣を放棄、既に右手に収まっている異様に刀身の薄い直角三角形の剣《閃くものアルーシャ》を構え、ユリアが無造作に前進を開始する。

自身の脚よりも太い木々を軽々となぎ倒す、巨大な獣の突進を紙一重で避けて、軽やかに右手を翻す。綺麗に首を切断された巨狼の巨体が背後に飛んでいき、細い木を道連れに倒れる。

「流石はお嬢様、お見事です」

無邪気な笑顔で囁すイオの背後で二匹の巨狼が跳躍。イオは背後を振り返る事すらせず、肘までを覆う黒い手袋を外して、天に突き出すようにして大きく腕を広げた。

腕に彫りこまれた無数の閉じた唇の刺青が開き、絶叫。怨嗟と絶望の慟哭を上げる。

そこから放たれた漆黒の奔流、歪な羽音を奏でる黒い塊が巨狼を瞬く間に多い尽くし、即座に巨狼の姿が消失。

イオの周りに展開する漆黒の塊は、蝶の形をした口と牙だけの魔法生物の群れだった。ただその口と牙で獲物を貪り食う事しか考えない、数百数千の異形の蝶が、薄い笑みを浮かべるイオに従って一瞬で巨狼を削り食らったのだ。

「うふふ、ふふふふふふふふふ……！ さあ、もっとお食べ」

唇の刺青が叫ぶ慟哭に合わせて、黒い死神が山林を覆っていく。巨狼たちが警戒の声を上げて後ずさるが、無数の食欲の権化たちは我先にと巨狼に群がり、その牙で噛み付き、肉を骨を食らっていく。地獄絵図と化した背後を振り返る事無く、ユリアは更に前進。背に負った盾を左手に構えた完全武装で、戦車の如く突き進む。

不用意に跳びかかってきた二、三匹を切り払ったところで、右手の茂みから飛び出した巨狼の牙を避けきれず、盾で受ける。

恐ろしい力で盾が押し返され、牙が盾に食い込むが、ユリアは怯まない。しっかりと足を踏みしめ、倒されまいとする。

動きの止まったユリアを見て、二匹の巨狼が両脇から襲い掛かる。

ユリアは牙の食い込んだ盾をあつさり手放し、背後に下がる。

巨狼の顎が閉じられ、盾が嫌な音を立てて碎ける。

後退に繋がる一連の動作で跳び掛ってきた一匹の右前足を両断し、無防備な眉間に左腕を突き込む。骨が碎ける鈍い音と共に巨狼が頭から落下。

馬手側から襲ってきた巨狼に牽制として腰の投剣を数本投擲。一つが左目に命中するが、突撃の勢いは失われない。

血涙を流しながらの突撃を避けられないと判断。首を狙う大顎を自ら後ろに倒れて何とか回避し、不安定な体勢のまま無防備な胸にアルーシャを突き立て、渾身の力を込めて振り抜く。

巨狼の胸から腹にかけて赤い線が引かれ、落下する血と臓物の湿った水音と共に腹を切開された死体が地面に落ちる。

流れ出る夥しい鮮血を浴びて、銀の甲冑が朱に染まる。

体勢を立て直す間もなく、盾を噛み砕いた三匹目が至近に肉薄していた。大顎が開かれ、鋭利な牙と血色の口腔が目の前に迫る。

「くっ！」

必死に首を曲げて、頭を砕こうとする牙の破砕器を避ける。同時に倒れこんでいたため、イオの頭と同じ程度の高さにある顎は僅かに外れた。閉じられた顎が鳴らす不吉な音が、獲物を逃した不快そうな唸りと共に山林の間に響く。

難を逃れたユリアは左手を軸にして回転。鋼鉄に包まれたつま先が巨狼の側頭部を強打し、頭蓋を破砕する。衝撃で眼球がこぼれ落ち、巨狼は血を吐いて絶命した。

更にユリアは上体を捻りながら半回転し、四肢をたわめ、大きく後方に跳び退る。

その後背に、イオが飄々とした様子で現れた。手袋は外したままだが、唇の刺青は沈黙していた。

「大丈夫ですか？ お嬢様」

「そちらこそ、無理はしてないでしょうね？ イオ」

声を掛け合い、互いの無事と戦意を確認する。

巨狼たちは、二人がただの獲物では無いことを悟ったように、距離を置いて唸りを上げていた。並んだ牙の間から、唸り声と共に仲間を殺された怨嗟が漏れている。

「さて、と。これではキリが無いわね」

「山ごと焼き払うほうが、手っ取り早くて簡単ですが？」

「火で山や森は死なないというけれど、猟師たちが生活できなくなつては意味が無いわ」

イオは頷くが、左手は背の百合の造作物 魔杖に触れている。

イオにとつては、見知らぬ人間の生活などどうでもよく、ただただ目の前の敵を排除したい欲求に駆られていた。

敵は多数。そして個々がただの獣とは訳が違う。そして足場が安定しない山林では、余りにも不利に過ぎた。

イオの魔法ならば、一瞬で広範囲を破壊する事も可能だ。相手が密集している今ならば、全てとは言わずとも、半数は撃破出来るだろう。

なにより 目の前のケダモノたちは、それ以上に危険だった。

だが、お嬢様と慕うユリアの不興を買うのは、イオの本意ではない。溜息を吐いて、ゆっくりと魔杖から手を離れた。

攻めあぐねているユリアたちの前で、巨狼たちの群れが割れる。灰褐色の塊の向こう側から、銀色の巨狼がゆっくりと姿を見せた。

雄牛ほどの巨軀をもつ巨狼の中にあつて、銀色の毛色を持つそれは、一際巨大だった。美しい紅玉の瞳が二人を映し、真珠色の牙、血色の口腔を覗かせて、巨狼の長が言葉を発した。

「何故、貴様等は我等を害する？」

静かな、しかし威厳と威圧感を備えた低い声だった。そして、隠



し切れない怒りと悲しみが含まれていた。

「伝聞通り、巨狼は人語を解し、話すことが出来るようですね」

場違いなほど呑気なイオの言葉。視線でそれを諷めつつ、ユリアは剣尖を下げて、一歩前が出る。

「何故？ それはこちらの言葉よ。貴方たちが獵師の一団を襲ったからこそ、討伐隊や私たちのような傭兵がここに派遣された。知性ある貴方たちなら、そんな事くらい簡単に理解できるでしょう？」

油断せず、毅然と背を伸ばして答えながら、ユリアは奇妙な違和感を感じていた。

巨狼の長は、伝聞に聞く巨狼そのものの姿であるのに対し、周囲のそれらは灰褐色の個体ばかりである。

巨狼などの、社会性動物の中でも特に限定された地域に固定して生息する種は、非常に仲間意識が強く、反面、排他的である。種が違うのでなければ、この違いはどこから生まれたものなのか。

なにより、巨狼の言辞は、自身が被害者であると考えているようにしか思えない。

どういう事なのかを考えている内に、巨狼の長が言葉を投げかけてきた。

「我らは警告した。これ以上進めば、命はないと。それを無視してこちらを害する行いをしたのは、貴様が獵師と言った人間の方だ」  
「だから、皆殺しにしたと？」

「そうだ。貴様等が我等を排除して貴様等の安寧を得ようとするのと、同じ事をしただけ」

巨狼の主張は、確かに的外れなものではない。獣の縄張りに足を踏み入れ、尚且つ警告を無視した獵師こそ愚かだったのだらう。だが、どこがおかしい。

いや、そもそも、何故こんなところに巨狼がいるのか。

伝聞によれば、巨狼とは遠い北の国に住み、銀の毛並みと紅玉の如き瞳、そして言葉を話す事から神獣として畏れられ、崇められて

いる存在だという。

知性と社会性を持った獣としては排他的ではあるが、決して無闇に人間に牙を向けるような危険な存在ではなく、むしろ比較的友好的な種族だ。

現地の人々とは少なからず交流があり、境界線を敷き、みだりに互いの領域を侵さないようにして友好関係を保っている……その筈だ。

だが、現実には伝聞をことごとく裏切っている。答えの見えない疑問ばかりが累積していく。

内心の疑問を保留にして、ユリアは口を開いた。

「しかし、それが愚行だという事は、簡単に理解できるはず。これだけの被害が出れば、如何に斜陽の帝国と言えど、黙っている訳が無い。直にこれとは比較にならない大規模な討伐隊が組織され、本格的な山狩りが行われる。そうなれば、どうなるかは想像に難くないでしょう?」

「そうだな。そして、我等は地獄に落ちるのだろう」

紅玉の瞳が、愁いの輝きを灯す。泥と血に塗れた銀の毛皮が、風を受けたように波打つ。

「なれば、我等は戦おう。我等から故郷を奪った人間を、より多く殺すために」

「故郷を、奪った……?」

憎悪が滴る巨狼の言葉を聞きながら、ユリアは理解した。

巨狼たちは、既に追われていたのだ。何故かは与り知らないところだが、こんな南まで南下してこなければならぬような事態が、人間の手によって起こされた。

であれば、彼等の、巨狼たちの憎悪はもつともだ。故郷を奪われた憎しみが、自制さえ効かずに、凶行に駆り立てているのだろう。

だが、間違っている。命を捨ててまで、復讐に生きるなど無益過ぎる。しかし、ユリアにそれを語る資格も権利も無かった。

「だとしても、人に仇をなす存在を、私は無視するわけにはいかな

い……」

アルーシャを鞘に戻し、丁度傍に転がっていた大剣を拾い上げる。アルーシャとは全く反対に、黒く厚い刀身を持つ、重量によって対象を叩き潰す事を旨とする大剣《断頭台ヒルダ》の二等辺三角形の刃の切っ先が、真っ直ぐに巨狼の長に向けられる。

「貴方たちが、これ以上無用になんに害をなさないと誓うなら、私たちはここで退く」

ユリアの言葉に、イオが魔杖に手を伸ばし、ヤマユリに似た優美な花の造形物を振り上げる。

「誓わぬと言うのなら……ここで、殺す」

放射されていた殺意が爆発的な熱波となる。巨狼たちが牙を鳴らし、大地に爪を立てた前足の筋肉が倍ほどにも膨らむ。目の前で燃え盛る業火の熱が、二人に吹き付けるかのようにだった。

「何故」

巨狼の長が、殺意に満ちた同胞を眺め回して、小さな声を漏らした。

「何故、貴様は戦うのだ？ その、人では無い身で、人のために？」

ヒルダを両手で構えたユリアの脚が、不安定な山道をしっかりと踏みしめる。

「ノーブレス・オブリージユ。それが答えよ」

巨狼の長が顔を伏せ、その横を無数の同胞たちが疾風となって駆け抜ける。

ユリアが迎撃の姿勢を取るのと同時に、イオが掲げた魔杖《狂い咲きグローリー》の花弁が展開、内部に納められた単眼の如き赫い魔石が妖しい輝きを放つ。

花弁の内側を埋め尽くす呪印が眩い輝きを放ち、開いた花弁の頂点を縁として魔方阵が展開、魔法が発動する。

発動した魔法が何であるかを考える余地も無く、後ろから伸びてきたイオの手でユリアが後ろに引きずり倒される。全身を甲冑で鎧

い、巨大な剣を構えていたユリアは成す術なく転倒する。

巨狼が驚愕に目を見開く。と同時に、イオの唇が酷薄な笑みを浮かべる。

魔方阵から放たれたのは、暗褐色の大瀑布。怒涛の如く放たれた液状金属の大津波が、巨狼や木々を恐ろしい速度で飲み込んでいく。多くの魔法使いが扱う圧縮した水や氷などとは比べ物にならない比重を誇る液状金属の波が、巨狼の堅固な毛皮や筋肉などなんら問題とせず、悲鳴さえ飲み込んで瞬時に圧殺していく。

暫くの後、液状金属が勢いを失って逆流してくるのを見て、イオが魔方阵を反転、暗褐色の海が魔方阵に吸い込まれて消えていった。後に残った、見渡す限りが金属の大津波によって破壊し尽くされた凄惨な光景を、ユリアは座して眺めるしかなかった。

「……凄い魔法ね、イオ」

「一応、イオの切り札の一つです。密集していて、尚且つ突撃してくる大群を迎え撃つには最適かと思ったので」  
無感動に告げるイオだったが、残念そうに山頂辺りに視線をやった。

「どうやら、魔法を放つ瞬間に逃げたのがいくつかいるようです。あのデカイのも、多分取り逃がしました」

位置が逆なら大半を殺せたのに、とイオは可愛らしく唇を尖らせる。

「追いますか？」

「……いいえ、もう日が暮れるわ。夜闇の中では更に不利になるわ。一旦山を降りましょう」

「お嬢様がそう言うなら」

魔杖を背負い、イオが素直に首肯した。ユリアは重い溜息を吐いて、ヒルダを背に負い、アルーシャを鞘に収めた。砕けた盾は、放置する事にした。

視線を空にやると、既に山頂付近に日がかかっていた。巨大な朱の円盤が、山の惨状を朱色に染める。

「……ねえ、イオ？」

「はい？」

揺らめく夕日をぼうつと見上げながら、ユリアは低い声音で言う。

「巨狼たちは、あちら側に逃げたのよね？」

銀板に覆われた指が指すのは、山頂よりやや北にずれた方角。

「ええ、私が見た限りでは、ですけど。それが何か？」

「……確か、あちらには、中腹辺りに小さな集落があると聞いた」

その小さな声には、迷いと、痛みの成分が含まれていた。

「彼等は、どうすると思う？ イオ」

主体の無い曖昧な言葉。それは己の不明による弱さだと、ユリアは己を恥じるより他になかった。明言できないという事は、覚悟が足りないという事。

あの日、墓前に花を添え、涙と共に誓ったあの日、相応の覚悟はしたつもりだった。

だが、現実はどうだろう。自分は今、泣いているのではないだろうか……？

ユリアの内心を知ってか知らずか いや、人の心を測ることを知らないイオは、至って平然とした調子で言った。

「まあ、皆殺しでしょうね」

須らくそうあるべしと言うように、イオは無表情だった。

## 咆哮か、或いは慟哭か（2）了

「お嬢様は認識を改めた方がいいと思います」

イオの声は、責めるような語調とは裏腹に、酷く淡白に聞こえた。  
「彼等は復讐者です。彼等は己の命などより、人の命を奪う事の方が重要なのです」

黒い三角帽子を風になびかせて、魔女は歌うようにさえずるように語る。

「もはや、彼等の寄る辺などこの世界に存在しない。それは、あのデカイやつが言外に語った事です」

「何故、断言できるの？」

「イオも　私も、同じ立場だからです。その気持ちは、痛いほどに理解できる」

ユリアは何も言い返せない。イオの鉛の瞳は遠い過去を見ていた。  
「我等が母なる大樹は既に燃え尽き、その灰から産まれた私たち姉妹は、我等最後の末妹」

人間はあらゆる他者を踏みにじって、その権勢を確立してきた。

巨狼の事だけではない。人間は人間同士でさえ、奪い合い、殺し合う。ただ、己のために。

「私は、人に拾われて人に育てられ、人として生きてきたからこそ、こうしているだけであって、もしも彼等と同じような境遇であれば、ただ生きているだけなど許容できない」

鉛の瞳に感情は表れない。血と炎に彩られた酸鼻な光景にも、イオは何も感じない。

「だからこそ、私は彼等を殺したいと思った。お嬢様の心を傷つけ



この力も、武器も全ては借り物で、ただ運良く手に入れられたに過ぎない。

ただの小娘である自分がこうして戦えるのも、全てはイオと、今は亡き義父の力なのだ。

両手に持った《断頭台ヒルダ》が、重い。だが、振るわねばならない。

敵は怒りに我を失った、哀れなケダモノ。もう、救う道は無い。

（いいえ そんなものは最初から無かったのだわ）

人としての身を捨てて、魔性に堕ちた身であれ、心は情弱な小娘のまま。

だからこそ、何も見えてなかった。何も聞こえなかった。

（イオは、最初から分かっていたのでしょーうね）

だからこそ容赦が無かった。殺す事でしか救う道が無いのだと、言葉ではなく行動で示していた。

イオの思考は余りにも単純明快で、残酷なものだった。

いや、残酷なのはこの世界の方なのか。他者を廃絶する事でしか自分を守る事の出来ない、この世界こそが。

そう、だからこそ立ち上がったのでは無かったのか。

理不尽な世界を打破し、人が人として平穏に暮らせる世界を手に入れるために。

貴賤上下を問わず、誰もが笑顔で暮らせる国を作るために。

全てを捨てて、理想と一つの言葉を胸に抱いて。

「イオ、手出しは無用よ」

「分かっております、お嬢様」

花咲くような可憐な笑顔。美しいもの、という意味の名前を持つ少女の微笑みに背中を押されて、ユリアは大剣を携えて走り出した。迎えるのは怒れる牙の群れ。牙を噛み鳴らして、巨躯が疾走する。先頭の巨狼が全身の力を解放して跳躍、と見せかけて急加速。

ユリアは即座に対応し、ヒルダを槍のように構え、放つ。

人外の膂力が乗った超重量の刃に正面から衝突した巨狼の頭部が



一瞬で潰れ、首ごと体に埋没。剣尖に突き刺さったままの死骸を、牙をむき出しにする巨狼に投げつける。

同胞の死骸を踏み越えて跳躍。更に二匹の巨狼が空中から襲い掛かる。

刃が巨狼を貫通させるほどの膂力で振り上げた刀身の腹で一匹を吹き飛ばし、返す刃で二匹目の足を破砕する。二匹は前足や胸を破壊されて戦闘不能。

三匹目は既に着地し、岩をも引き裂く爪が兜に命中。真つ二つに割れた兜が宙に舞い、黄金の髪と瞳が外気にさらされる。

額が割れて、血が噴出す。視界が朱に染まり、苦痛が心を焼く。

「いあああああああああああああつー！」

喉が潰れるほどの絶叫。渾身の力を込めてヒルダを振り上げ、下ろす。

超重量の刃が巨狼の巨体を完全に両断し破壊、どころか衝撃で二つに分かれた体が左右に吹き飛び、それぞれが血と臓腑を撒き散らし、それらが一瞬の雨となって降り注いだ。

額の傷から血を流したまま、ユリアは突撃する。呼応するように数匹の巨狼が突撃してくる。

その赤褐色の瞳には、同胞の無残な死を悼む色は無い。むしろ、自らの運命を受け入れたような、冷たい静謐があった。

だが、ユリアにはそれを感じ取るだけの余裕が無い。苦痛が、疲労が、失意が、ユリアの目と心を侵していた。

両者が激突する。

片手で振り切られるヒルダの軌道上にあつた首と足が碎けて吹き飛ぶ。ヒルダを振り切った隙について、右腕に食らい付いた巨狼の顎が閉じられる。

甲冑ごと右腕が噛み砕かれるが、苦痛を無視して左手にもったヒルダの柄頭で巨狼を殴りつける。碎けた眉間から血を流して、巨狼が右腕から離れる。

ユリアは出血の止まらない右腕を放置して、ヒルダを手放した。

左手でアルーシャを抜き、飛び掛ってきた巨狼の腹の下に飛び込んで左手を大きく一閃。腹部を縦に裂かれた巨狼が苦痛の声を上げて地面に激突する。

弓手からの爪の一撃を上体を捻って躲し、反動を利用して刃と全身を左方向に回転させて掲げられた前足を切り飛ばす。次いで喉に刃を引っ掛けて引き裂いた。

自分の方へ傾斜してくる亡骸を後方に跳び退って避ける、が馬手から回り込んできた巨狼に吹き飛ばされ、崩れかけた家屋の壁に衝突。いくつかの壁を貫通しながらそのまま突き抜けて、反対側に出た。

地面に叩きつけられた衝撃で胸が圧迫され、呼吸が一瞬止まる。何度も咳き込みながら、ユリアは自分の負傷の程度を確認する。

右腕は血塗れの皮袋と化してぶら下がっているだけ。今の衝撃で肋骨がいくつかやられたかも知れない。額の出血で視界が制限されている上に、右腕との出血で意識が朦朧としていた。

既に戦闘能力は半減していて、このままでは命さえも危うい。

それでも、ユリアには退く理由が無い。退けない理由だけが、その胸に刻まれている。

拡散する意識を強引に繋ぎとめて、重くなった足を必死に上げて走り出す。

激痛から逃避するように、ただひたすらに敵の姿を探した。探すまでも無く、目の前に巨狼が飛び出してきた。

剣を振り上げる。剣尖が震えた。力が抜けて、体が前に傾斜していく。

（ここ、で……終わる、の？）

心は前に進んでいる。肉体が追いつかない。貧血で蒼白になった顔が地面に落ちる。

苦痛に意識が削りとられていく。

そして、視界が暗転。

闇に落ちる。

誰かが呼ぶ声が聞こえた。

気配を感じて、ユリアは目を開いた。

痛みは無かったが、体は動かなかった。

記憶が混濁している。意識は攪拌した水のように渦巻いていた。眩い光に目を細めながら、ユリアは混乱する自分をなんとか落ち着かせようとした。

とりあえず、ここがどこなのかを確認すべく前に目を向けた。眩い光を切り裂いて、天高く枝を広げる、雄大な大樹が視界を覆った。

数百年を生きる大樹の下に設えた、丸いテーブルを囲んだ三つの椅子に、二人の少女と一人の老人が座っていた。

黄金の髪と青玉の瞳の少女が、嬉しそうに老人に話しかけている。片や、鉛色の瞳と髪を持つ少女は、顔を伏せて黙り込んでいるだけだった。

老人は、二人に柔和な笑顔を向けて、何事かを語りかけている。

それは、ユリアの幼い日の光景。

イオノプシスという友人が出来た日の出来事。

自分の過去の光景を、他人事であるかのように、ユリアは眺めていた。

涙が溢れるほどに懐かしい景色。

もう戻れない、人としての幸せの在り方。

何故、こんなところまで来てしまったのだろうか？

心の奥底から、水面で弾ける泡のように、疑問が心の中に浮かび上がる。

「それが、君の選んだ道なのだろう？」

老人の涼しげな声が耳朶を打つ。

「私の遺志と教えを受け継ぎ、立ち上がったのだろうか？」

嗚呼、と声が漏れた。老人の深い藍色の瞳が、優しい光を湛えていた。

「ノーブレス・オブリージュ。私たちがその魂に刻むべき言葉」

涙が溢れた。懐かしさではなく、己の弱さ故に。

「痛みを胸に刻み、悲しみを糧に、誇りを心に背負って、君は立ち上がった」

老人の右の人差し指に嵌った指輪が、白銀の輝きを放つ。それは、今、ユリアの指に嵌っているものと同じもの。

N・O。

ノーブレス・オブリージユ、誓いの言葉が刻まれた、誓約の証。

「さあ、いきたまえ。ここは君の来るべきところではないよ」

老人の言葉に頷くと、景色が急速に遠ざかっていった。

意識が光に飲まれていく。

「  
ユリアお嬢様」

誰かが呼ぶ声が聞こえた。

唇に、柔らかい感触がある。それが最初の感覚だった。

苦痛に顔を歪めながら、ユリアの目蓋がゆっくりと開かれていく。  
「お目覚めになりましたか。お嬢様」

鉛色の瞳と黄金の瞳が出会う。背景には、火種が燦る炭の塊と化した家屋が並んでいる。

「……イ、オ？」

「はい。イオですよ、お嬢様」

無邪気なイオの笑顔が、目の前にあった。どうやら、膝枕をされているようだった。

「う、何で……」

立ち上がろうとすると、激痛。痛みの下を目で探ると、砕けた甲冑を外された右腕が、沸騰するようにして急速に再生していた。

イオの唇の傷から血が一滴漏れる。それで合点がいった。

「血を、分けてくれたのね」

「はい。イオの眷属であるお嬢様には、イオの血は最高の治療薬です」

意識を取り戻す時のあの感触は、つまり、そういう事なのだろう。

「……って、イオ？　なんで、唇から、あれ？　ええと……」

「うふふ、今更恥ずかしがる事なんてないですよ、お嬢様」

イオの言葉にユリアの顔が沸騰する。

「な、なななななな、なんてことを……！」

「もう、ユリアお嬢様ったら、かーわいい」

くすくすと笑うイオに釣られて、顔を真っ赤にしたユリアもぎこちなく頬を綻ばせた。

イオの手を借りて立ち上がり、周囲を見回す。夜は明けており、

巨狼の姿はどこにも無かった。

「……彼等は？」

「追い払いました。ここの狭さと家屋が邪魔して、私の魔法もあまり役に立たず、殲滅するまでには至りませんでした」

イオが残念そうに言った。ユリアは、どこか安心したように肩を落とした。

「そう……でも、イオが無事でよかった」

「それより、お嬢様が無事で何よりでしたよ」

表情は優しげだったが、言葉には棘があった。

「次からは、何と言われようと、イオがお嬢様を守りますからね」

ユリアは思い出した。小さい頃、まだ言葉も話せないイオに、自分と同じような事を言ったのを。

何の因果か、今度は自分が言われていた。なんとも皮肉なもので、可笑しくなって、ユリアは笑った。泣きながら笑った。

「どうしたんですか、お嬢様。まさか、頭でも打ったんじゃない……」

「馬鹿ね」

握り拳をイオの額に押し付けた。イオは理解不能というように目を瞬かせる。

「ああ、で、巨狼の方はどうしましょうか。もう群れとさえ呼べない数ですが、小さな集落や猟師に対しては十分すぎる脅威ですけど」

イオはユリアの心情を汲み取る事もせず、に言う。ユリアは小さく溜息を吐いて、首を横に振る。

「いいえ。私たちは、依頼人の下へ帰って、結果を報告しましょう。完全ではないにせよ、八割方依頼は達成できたのだし、何より、たまには税を搾り取るだけの領主にも働いてもらわないと」

「それもそうですね」

「報酬が減額になるのは、避けられないでしょうけどね」

全身が痛みを訴えるのを無視して、ユリアは歩き出した。そこに散らばった自分の武具を拾い上げる。

《断頭台ヒルダ》の重みが、今は頼もしい。

《閃くものアルーシャ》が陽光を反射して煌めく。

それぞれを背と鞘に収めて、無残な有様を見せる元集落の光景を目に焼き付ける。

「さて、まずは集落の人々の弔いから、始めましょうか」

死者を弔うという人間独自の文化を理解出来ないイオは、不承不承というように頷いた。

朝日が二人を照らし、そして、その恩恵を全ての生けとし生けるものに振り撒くために、空を昇っていく。

あの朝日のように、万人にもたらされる平和を築き上げるためにも。

そして、老人と交わした約定を果たすために。

自分をもつと強くあらねばならない。

かつての誓いを、強く強く思い描いて、ユリアは前を見据えた。

「クリストファのおじさま。私は、決して諦めません。どうか、見守っていて下さい」

その声は誰にも聞かれる事は無く、空気の中に溶けて消えた。



## 咆哮か、或いは慟哭か（2）了（後書き）

導入というか、プロローグ的なお話です。

実際はここに投稿する事を念頭に入れていなかったなので、微妙な長さからそういう扱いにしておきます、的な！

そういう事でまあお願いします。

次話投稿は結構先になりそうな風味がしますね。

それでは、水晶人でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8558i/>

---

N . O .

2010年10月9日23時41分発行